昔語庫

屋四

初篇

東京都立中央図書館蔵書

昔語質屋庫　巻之四

東都　曲亭馬琴演

平将門袞龍の褻束乃下

さて目今も論ぜしごく。七人の将門を。いづれともうたがひけれども。秀郷竊に美女をりて。その蜂谷の動くりのを。真の将門なりとおもうてられば。遂ふ三郎を射ころしといふ小説ハ。藤六左近が狂歌より生ず。後ふその局を結ぶりの。又一條の怪談を添く。将門の首級京師へのぼされて。棄られさうけ新ふ。怨霊その首級ふとびまろうて。なほ枯ど。夜なく光をあらはす。ひとが軀を返せ。頭を徳て。今一軍せん。と呼ばるる。人をみな怖て近つくのみ。かくてある人三郎をえく。〜将門ハ来うをようぞ。切られる。俵藤太が。そうこをあく。と泳しべ。お門の首級。呵ことうち笑ひ。ずて目を閉て。

早稲田大学文学部書
個人蔵書
雲英末雄
54-00069

死しうとしつる。頸しるのへまとうるのく馬ふ乗て。ア〻が家へ帰りとい〻
怪談を。捜神記ふも載うまとど。誰うへこまを実うのとせん。件の狂歌
へ。蒜六といふうのく詠うるは。保元平治物語ふ見えうる。この蒜六ハ狂言
利口をりて當時世ふもてはやされべみや。宇治拾遺物語巻三之十一條ふも。蒜六
が歌を載うる。むうるうのうぐ不けのちひそ。ふるうのをがをうるとどもうこまを人の家ふ入りて。渦ふ
あうるうの紙。をひうるこを家あうどの女ふ。咎められうるとを。詠うるとうん。
又仁和寺の藏書目録ふも。蒜六傳といふうのあうるは。ある人いうは。何の
ちん時の人うのうこへまうべ。恐うくハ将門う後の人ふて。ふをのをを詠うるふ。
あが人ふ膾炙せうべ。當時小説を綴うるの。蒜六が歌うるひうて。蜂谷
の動くうの紙。真の将門ううは。その改うる母死ざうはうのんどいふ。怪談をば
作り出せうのべ。件の歌のこうハ田原を俵ふうけて俵蒜太というん為ふ。

米うをこへ詠うるこ。実ふ将門ハ蜂谷う射られうるふもあべ。
まうるふ実ふ射門ハ米うをうまうをこをんとをふうのハ。歌を詠まうぬ世
俗の推量うれべ。論ぜるふ足ふべ。為義判官ふうはうとうる。奈良法師ふ
が神木を奴らんとうく。京師近く来うぬと。ふえうべ。防ぎをめうと。仰ふ
下されし程ふ。宿所へも立ふらべ。郎黨つづふ召倶して。栗子山へ逃
向ひ。穂て追ふうてうう。時の人戯笑歌ふ。奈良法師。栗子山ゆで。ぎう
来て。つぐ物の具を剥ぎとうる。と詠うるは。その〻ふ為ふ実ふ奈良法
師ふ。ぐ物の具を剥ぎうう是ふあうべ。栗子山といふをうけく。ぐ物う
具とつづけ。栗ハ皮をむうるうのうる是べ。剥ぎとうること詠うるこ。今昔
物語ふハ貞盛矢ふうてつづひて幾ふるふ。射門が弓手の眼を。胃の袋ゆで。矢
さえうるく射ぬけ是べ。将門ふ数の猛将う是ども。この矢一筋ふううて。

馬より逆さまに落るを。秀郷たゞちによりて首をとりしとなん。又将門記にハ新皇晴に。神鏑に中て独蚩尤の地に滅ぬといへり。将門記によるときハ流矢に命を落せしなるべし。又今昔物語に。純友が子が首を京に持のぼりしかバ。右近馬場にして。そのよし叙奏す。洛中の貴賤これを見物す。翌日左衛門府生掃部在上といへる畫師を召て。彼首を御覧ぜんとおほせども。内裏へもち入るべきにあらねバ。写してまゐらせよと仰下されしかバ。右近馬場に来て。其首を写してまゐりけり。頭のかたちもかはらざりけり。此在上ハ。物のかたちを写す事殊に妙を得たる畫師之云と見えたり。人の肖像をよくうつせもの。昔もありけり。かゝれバ将門が首級の京へのぼりしと見ゆ。観るもの堵の如く。さまざまに浮たる説をなしたりけん。推はかられ侍るに又聞書の第三第四條に。将門純友比叡山に登りて平安城を直下し。密に逆意を相語ひしといふ事。或ハ貞盛京師にて。将門が謀叛せんとを察して。是を撃んとおもひつゝ。終に果ざりしといふ事。これみな當時の巷談街説するを。好むものが。物にも記しおきぬ。されども将門純友東西に起るといへども。合戦のやうを接ざるに聊も諜しあはしたりといふ事なし。又貞盛の父常陸大掾國香ねしハ将門が為に叔父なれども。其ゆゑ不和なりしかバ遂に所領の事によりて。互に干戈を動さんとせしぞ。その事速に京師へ聞えて。その邪正を糺明ありし程に将門上洛して罪を謝し奉りしかバ。朝議格別に恩赦ありしぞ。東へ帰る事をゆるされぬ。この比貞盛朝臣ハ洛にあり。件の将門ハ父が家の仇となるべきものなり。とおもひて。折もあらバ暗撃にせんとこそ謀りけめ。後にこの事伝へ聞ものゝ。貞盛朝臣の武略を稱するのあまり。此

比叡山より
二光
平安京を
直下ところ

瀧口小二郎將門
伊与掾純友

良兼朝臣ハ天慶元年六月中旬ニ病死ス同三年二月ヨリ將門滅亡

人えでめくろ。將門の謀叛せんとそ思ふて。度々教めんとすれども。果ざりしといへるなるべ。かくて又國香將門の和睦破まて。土浦の城を落され。國香朝臣討死して。妻子郎黨東西ふ没落せしとや。國香と將門と。兵女をあらそひくるの起るといふ一説あり。とまれかくまれ。將門ハえでめくろ。叛逆の心ありしるべ。この比國司威稜衰へて。掾郡司なんど。或ハ武勇ふ誇り。或ハ文才をしるのて。その下知ふ從ハざ。我意を振ふと。妻子國香將門叔姪の確執起り。終ふ八箇國の騒擾とるのりしるべ。かくして姪ふ常陸前掾源護の子ども。扶隆繁ホ三人。將門が爲ふ害せらるとて。悪行紂過せるべ。上総介良兼朝臣大ふ怒り。將門を討滅さんとて。婿合戰を催さ姪ふ。前上総介高望王の妻の子。平良正ハ良兼と兄弟なるふ。

こと。を助けく。叔姪頻ふ戦ふとのべども。將門が武勇ふ敵ハざるべ。一族の確執ふて。謀叛と名るものの。唯貞盛朝臣のみ復讐の志ハあるのみ。勢ひ彼ふ敵ハざけるべ。且く怨をかくして。將門ふ從ふと。文室好立とも。ふ首途とる折。將門ハ一ことをつけて。百餘騎の兵ハて追せ。ふ信濃國小縣郡。國分寺の邊ふて。貞盛好立追ふ。好立ハ矢ふ中り。貞盛ハ辛ぶて山中へ隠れ。まるふ。天慶平八年春二月。權守奥世王。源經基朝臣と。足立郡司判官代武芝と。不治のよう。平ひて。事なくと。ハえ。將門ことを。ふ爲ん爲ふ。武蔵國へ立越。既ふ和睦とり。待べとのべども。武芝が後

陣ろう。故ゐ〜経基の営所を囲みしゑば。経基朝臣ふう〜疑ひて。
穏て上洛し。事の趣を奏しゐふふるて。将門又一層の罪を倍て。謀叛の
ふ紀風聞せらるゝを。東へ攻えしゑば。奥世王も。牙の罪道まぐと
ゝひて。頻ふ将門ふ謀叛をすゝめふけまべ。将門も亦武勇をたのみて。ふ
すゞめて。東国残りゐ〜餐蹙け。勢ふ乗じて。京師まで攻のぼらんとふ
謀りしに。こまへ是将門紀の趣ゐる。又神皇正統紀ふ。平将門ハ執政
の家ふつゝふまろうけるゞ。使の宣旨を帯ミヤけり。許しゐのゐざうければ。
憤りて。東国下向して。謀叛をおこしてそりう。まゞ伯父の常陸国の大掾
国香を殺しゝば。国香自殺しぬ。こまてゝう坂東を推るべし。下総国相
馬郡ふ居所を占て。都と名つけ。ゞゝら平親王と稱し。官爵をも
あゝろう。是ふうて天下騒動せ。参議□部卿悪右工門督藤原忠
文朝臣を征東大将軍と。源経基。藤原仲舒を。副将軍ゝうく
ふゝつふさる。平貞盛。藤原秀郷ふ。紀ゝうふて。将門を討ゝ。その
首を奉しゝば。諸将ハ道ゝうゝ来る。将門ハ。義平五年二月ふ生れ
その翌年を経ゝり。と云ゝう。ゝれども将門紀ふ由と云ハ文碩前後さるふ
仰ゝう。こまハ只。世よいひて伝るまゝふ。紀さんゝるゐ。又秀郷朝
臣そのだゝめ。将門ふ与せバや。とゝひて。下総へいゐ紀くふるふ。将門追従
麁忽ふて。その器ふあらざりしゝば。猶て下野ふ立ゝう。貞盛朝臣を副
て。終ふ大功をゝたゝ。といへまど。ゞゝつゝるゐとゝ。秀郷ハ。世よまゝふれ
ゝる。武略の達人ふて。その人となり。朝敵ふ与まゞゝ。もあゞべり。果して。
事を両端ふ謀りて。だゝめ将門ふ与せんとゝふ。ゝあらんふハ。後の軍功も
たのゝからゞ。将門ハ。ゞゝうふ東八州を掠奪して。ゝゝ。ゝ猶り。彩皇と

僧上人て。下総の亭南ふ宮殿を造営して。平安城ふ擬ひ。機橋をりて。宗の山崎と。相馬郡大井の津と。近江の大津と。左右大臣。納言参議。文武百官。六辯八史。をぐく殿ぐ定めまどひとり暦日博士を閑うといへがどれ畢竟狂人の所為ふ等。こまらのてのハ某もいと苦くくちひくこのとれ秀郷下野ふありつぞその為体を偽哭ざるざるこの為体を偽哭ふらんあハ。苦よ謀るふ足らばとせば。下総ふ赴きて。こまと対面て。何うハせんか。将門いまご謀叛のふつば。新皇と偽称せざる已前ふやありん。こまゐ亦彼貞盛朝臣ハ。ふく山中ふ躲まて。仇人の鋒を避け。密ふ為憲秀郷ふ諜ど令て。短兵急ふ。公私の剛欲を滅くられば。その功をふかきことせど。その次ふハ常陸攻孫原維幾紀臣の息男為憲朝臣と。下野押領使孫原秀郷朝臣の功も又大なり。さハまた将門の立地ふ滅亡くるハ。忠文忠舒。経基ホの官軍数万人。駿河国まぐれよけまば。将門ふ属従ひる烏合の兵ホどのう紙偽哭さ。いさく驚き怖まる。或ハ落うせ。或ハ降参く。残ア。とどまる兵ハ。僅千人ふ足らざるうふけまば。将門勢ひ究りて貞盛秀郷ふ撃まる。もれば忠文以下の大将。ごづらう朝敵と戦ごといへとも。その功なとぐうとぐ。又問くて。ホの第五條六郎公連が。将門を諫ねて死くるとふうハ。遠うらぬ世の小説ふく。往くるの紀ヒ。将門記ふ。義平七年十一月五日を以。久良兼。掾源護。并ふ平貞盛。公雅。公連。秦清文凡常陸国等。将門を追捕まぐさ官府を。武蔵。安房。上総。常陸。下毛野ホの国ふ下されぬ。とえくろ。かまば公連ハ。将門対手の一人なり。

但天慶二年のとし。内竪伊紀貞経といふもの。将門を諫めんとす。
まうれども将門これを用ひざ。却理を非ふ推て詰りしかば。貞経ハ舌を巻
口を鉗て閑居せり。と将門記よ見えたれば。この貞経が上表唱悍て。公
連ぶてのことなるべし。又同じく不の第六條ふ。忠文朝臣ひとり勸賞ふ
偏なるをうらみ憤り。握りつめさる指の爪の。手甲へ徹て血を流し。死
きて悪鬼となりぬ。といふもの例の小説こ。忠文朝臣ハ征東大将
軍ニて。従自餘の輩と。勲功の賞ふ偏なりとも。忠文ひとり
偏なりんや。但奥州後三年の合戦の。偏執の沙汰ふりて。勲功の
賞行はざりき。奥州後三年記よ。将軍義家。四解を奉りて十人の武
衡家衡が謀叛を追討の官符をなりて。首をとそまらんと
ヤとおもへども。こはこの歌ふ。定りぬと思て。
背をしてふるべらざるよりぬと思て。
京へのぼりぬ。この例ふよりて。文治五年ふ

頼朝卿。奥の泰衡を討のゝとられも。亦追討の宣旨ハなりきさ。おそ
節刀をのりて追討使官符をのりたる国司の。朝敵を討成るる
ふ。勲功の賞行はざるハ。頼義朝臣の貞任宗任を討ひらげ。
頼信朝臣の平忠常を討滅しの。ひとる。功ありて賞なきハ。
この例なり。按ずるふ。忠文朝臣憤死のよ。似り出せり。左衛門督
藤原誠信朝臣の。氏嫁りて。くるるのらん。大鏡巻第五恒徳公の
段ふ。左衛門督さゝのゝ。亞相を尋ヤされ。どそのうみ。
られふ見ば。悪公おこて。三十八歳ふ。なくなりぬ。ひさ。ぢりくろ
あくこと。手をつゝ握りて。除目
て。物もまゐぶ。うつぶくのるわどぶ。年ひつれく。七日といふ失のひし
ふ。握りこゝびこゝる指ハ。おまうふつゝて。上ふこそ生のひふれ。みだれ

寿信 恒徳公の二男 権口弁 言正二位 道信 恒徳公の第三子 従四位下右

誠信 食言

中将共ニ誠信の力ヨリ

情強上ゴフゾ[illegible]セ。[illegible]とある紙假りて。忠文のるのふか作りえるべ。左三門督誠信と。右衛門督忠文と。官爵名告も。その唱仰くひろ。これらエビの小説なるを。軍記ふさえ。我らまこれば。世俗大くさ忠文のるめとと。宇治の橋姫と。その怨霊合せ。といへ。怪談も。この人宇治に住のひとれがいへ。又ね門追討の官軍ハ。朝敵滅びぬと。空て。駿河国へ。京へなり来るとて。ふく物ふも記しされど。将門記よると。官軍既ふ。将門が殺まこるを。空といへども。途へ。及落せ。ふへあらば。海道の数手の将軍。刑部大輔藤原忠舒。忠文の弟下総權少掾平公連。軍記よね門を[illegible]て自殺せ。といふ右郎公連是を押領使とて。四月八日をもて入部して。即謀叛の類を尋殺。その内賊首ね門が舎弟七八人或ハ鬢髪を剃除して。深山ふ入り。或ハ妻子を捐棄て。各山野ふ逃といへり。

このとき紀與世王ハ上総国ふく生物ふれ。将門が兄ね牧と義ふ玄茂と。相摸国へ到て。官軍ふ報害せられるふなん。さるもこの忠文朝臣ハ。智勇も大くさふへあらざりれ。あや。佐藤三郎兵衛尉盛綱法師三念が言ふ。吾吹。天慶年中。平将門東国ふおいて。叛逆を企しと紀。宇治□部卿追討使へり。膳を羞るの間。この宣下有べこの旨を空。戸部筆を拠て。坐を起て。則来内し。節刀を給るの後。帰宅ふ及ばず。直ち洛外ふ赴きぬ。勇士の志とこそ。こまをりて善と紀。と東鑑ふ見えへり。かまが忠文。官軍の後まるを俟んとく。処ふ沢国。終ふ合戦ふ及ばずとふ。学者の説ハ信ぜるふ足ず。何ものの悪ろ字をとりけもぐめそ。神皇正統紀ふハ。悪右衛門督と記さまてふや。伝写のもの。信頼とそうちぐへるる。又宇治悪左府とそひしぐされり。

ところなるに。その人、宇治ふ住けるとべ。世養て宇治の□部郷とのひろう。奪を好きく暇なしうべ二品式部卿重明親王（雅樂天皇の子）こづら宇治よ
いまたく。忠文ふ奪をとひとうのひくうの今昔物語第三十巻ふえ
ろう。又ねの門第三の女兄尼とうくりて。如義と法名く。奥州恵日寺ろ
側ふ。菴を締びて寡居ろう。有一日病く頓死くうけるふ。地義井の
冥助ふうて。蘇生きろうべ。世の人地義尼と渾名く。年八十餘
ふくて迂化をとえ亨釋書（巻之十八）ふえくう。又ねの門の子ふ。平良門と
いふの。摂州多田の城を攻く。満仲朝臣を撃んとく。却源二綱ふ
撃まるに。物ふいう。とへ究めくる小説ふく。あうつをふいあとべ。今
昔物語ふ源宛と。平良文と。常ふ武藝の甲乙を争ひ。有一日各。
軍をとのく廣野ふ出く。徒員を試くふ。おとうねの弓馬の達者ろうべ。

貞盛丹波守ろくとくふ考を汲む。息維衡（キヤスヒ）ハ桂侍のとき

互ふ感じて和睦くうよう。彼宛が字を。三田源二とのひ。良文
が字を。村岡五郎とひろう。ようて宛を綱ふ。良文を良門ふて。良
門が多田攻とふる。紙似り出せくし。大系圖をとりて推とれハねの門の子
ふ。良門とふのは。良文ハ高望王の季子ふく。従五位下陸奥守
将軍ろう。村岡五郎と稱を。便ねの門が叔父ふ。将門のふふ。良門とふ
のの出家くて生涯行ひをまくてありろうは。何ゆうふ。ふそえんろうしが。
書名を忘をくれべ。頓ふハ捜り出ぐ。とをもは否ハもうらぢ又。
平貞盛ぬくハ。そざま猛く。凄ぶ人ろう丹波守ふく在任の時
悪瘡出来くうべ。京ようの医師を迎下くえせけをとべ。兒干とふ業
ろのうでハ治ぐとふ。妊婦の腹をさたく。男兒なれべ。
それを素ふ加く。調剤をとろん。貞盛その子の左衛門尉維衡を

にて父の任国へ携られゆるなるべし既に左衛門尉さらんはは京へ参なりて又ともよ丹波へは赴くべきらん

呼びて。この薬を求むと。世に志られて八牙の為ありけるん。汝が妻懐任なり。その腹を裂てとりにとへといふ。維衡これに驚きなげらうけあらぬと辞く。さて医師許されて。かゝるのあり。つにせんとて泣にけれバ。医師案て。されバその難をのがれんとぞ館に匿して。薬ハ四とめさせなんや。と問バ貞盛点頭て。それハ左衛門尉が妻の。懐妊しゐるを乞うけて置ふと答ふ。医師聞もあへぞ。それハ何ふかせん。ちぶ胤ハ薬にならバ。とく求めなへといへバ。炊女の懐妊しく。六月になるを引出させて腹をさされて見るに女子なりけれバ又外にて孕婦を求て薬とのへさせて病を愈しけるさて医師にハ物多くとらせて後子の左衛門尉維衡を呼びて。かゞ療ろ。見干にて愈るよしを彼医師が人にいへんと疑ひなし京へ上りのぼる

を埋伏して害せよといひけれバ維衡一議にも及ばずて兼て引て落よ医師に。そのよしを告知らせければ判官代を馬に乗して医師ハ忠うなく従ふ。維衡ハ山蔭にかくれるて盗賊のていにて待。判官代を一箭に射殺して。館に帰りて射しなりてしるよしいひしが医師が妻と子を救ひつかに答ふるとしける。医師ハ生て京にありて判官代が殺されしよし貞盛聞て。これハいかにぞと問に。維衡これにて医師ハ歩にて従者の少々くしと志らバ馬上にありしとて主ぞとおもひて。射ころしけれどしらバ守盛もさぞあらんとて。そのち八強ていはざりしハ貞盛が一の郎党館諸忠がもとめのかへりぬると嗅つけて。がくる侍くるなり。と今昔物語巻之第六ふあんえさり。あるべきことともいへれど既よりいひつるものを指して。

たゝふ書をめされば更ふるの死とも誣がたゝり果て如此
なるとぶ貞盛朝臣ハ人情ふも漏る。罪ふ死人なり。是を忍ひ彼
をかりふ。その公ざまの猛く。虎狼ふ異ならざる。そもゝ祖門ふ
家らびとん宣なるる邦七代の孫清盛入道ふ至て。その暴究り。
子孫遂ふ朝敵の罪名を負ぬ又彼医師ハいふころえるやらん。
医ハ仁術とこそ母を教て。その赤子を茱ふせよと教る。これ
が公ざまの又貞盛ぬゝよ劣らぬと憎べきなり。こゝ是くひさ
用ひる。將門紀といふりハ。兼德三年正月廿九日ふ。大智坊ふ於て
拜書をと奥書あり。堀河院の御宇ふ當たり。現ふも此ころ書綴り
るりのとぶゝて。御教書なんどいふをも見えさぐて漢文ふ擬て。
書ざまいと拙けれども。究めて古書。そもゝ婦幼のこゝあよ
將門ぬゝの古衣なるまども。よろ死とハうとつひ。あゝ死をびあゝといふて。
物ゝなる匿ゝと臣。敵とるり身方とるるも。顯身の世よあるわどよ
とて。死ゝての後ハ何らあるべき。されば人ハ也の人ふあゝを。辭ハ後ふ
遺もゝまど。妻くふ訛を偽く。訛を志べ。実るをくるの。虚言
おゝるハ。物の本の常なるまば。実るのもよ。虚言も又おゝるねど。
よく史を続。実録を閲て。さて草紙物語をえゝらんあハ。ようて未まる
ふを志るから。虚実をゝろふ辨へ易し。書をゝく理義を易ど。そよ
求るとなるハ。拙べる山ふ遥ふがど。善を偽へ悪を偽へ。あるとをありとし。
又なる死とをありとゝるも。皆是書の中ふあるまば。勉てその悪を懲し。
その善を訪んとゝふのゝ。ゝられば人も也ぬべけまどぜめその罪をろ得
ふ。かゝる拙びをるゝふとそ求めて古人を非るふハめべ。よく吟もつり

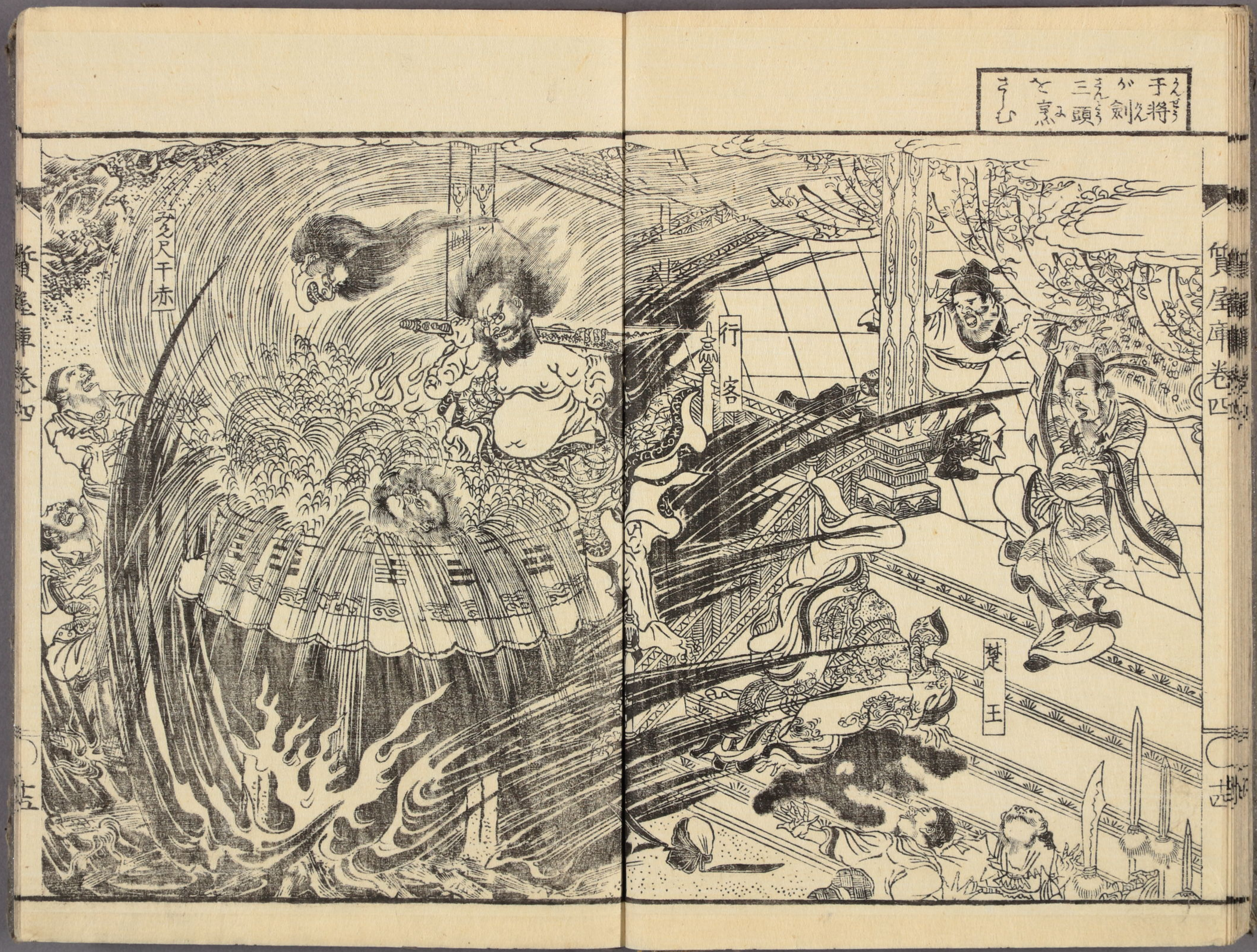
ものといへべきなり。眞うちうちてぞ感じいりぬ。

第八　眉間尺が髑髏盃

浩知ふ。姫るびとる唐木の匣ふ。高紐うけて。眉間尺が髑髏盃と写れるが。古衣の迹ふ居くるまべ。衆皆ひそ〳〵とまこを見て。世俗ふとさ〳〵まふれとる。眉間尺が髑髏りて。他まる盃るのふびと寄〳〵。その紐をゆ〳〵解てよ。といふ。傍るるりのをとうけて。猶てぞ蓋をる花ふ忽地跳ひ出るりのつりふも仙ど木を彫て。底ふ〳〵しる盃へ靭絵を金ふく泥とるなれべ。をる呆まを果て笑を忍び。匣書つけふ髑髏とあるふこをる匣と盃とぞう合せるりのるびび。髑髏盃といふりのの人の頭顱ふ漆〜て。酒器と匣りのるふ。木彫るれべを匣とるびぶ。これいつふと呼まべ盃も又歎息。何なふこの名あるるや。某も絶てもびぶ。彼眉間尺といふ猛者ハ唐山楚国の劔匠干将莫邪が子ぞいふる。楚王の妃肥満て夏の日の炎と苦を光る熾の柱を抱きつゝ。額を冷〜ぬひ〳〵べ。終ふその気を感じて干。孕て熾の丸をいとりりふ産のひぬ。完上の鋼鉄るれべ。楚王これを干ねふ剣を造ふ。干ね命をうけりつ。その妻莫邪ふ合鎚りて。凡三年ふて雄雌の劔をべ作りつさて陽の劔を干ねと名つけ。陰の劔を莫邪と唱ふ。まこ二ツのをつ進ふ。まんとつと情〜ひ〳〵べ。陽の剣を深高〜て。陰の一口をたてまつるふ。楚王その成まるこの遅さを怒りて立地ふ干将を殺〜そうふ。まるふ干将が遺腹の男児あり。彼干成長ふ及びて。母の丈高〜。膂力つよ〳〵。眉の間の廣れと。一尺ふあまり。眉間尺とぞ喚まける。かくて有一日母莫邪ふ。父の王を問べ。母ハ啼泣ひぶ子ふ対ひ。もん母が父ぞ楚王の為ふ剣を作りるひ〳〵。三年ふて作り果ふ。王その遅を責。又

一つのつるぎ剣の呉一つるを怒りて家ゐもりくさで教へのひさかゝあびと緣く
まれば此牙が父吾を死よ吾倚ふ密語のふやうこれ母ゝば教されるん戸を出て南山
を下るまば松石上ふ生り。剣はその背ふあり。腹ある子成長後ふ問ば如此答よ。一
宜せーと告ふけまば。眉間尺大さふ驚き。父が非命の死を悲こそ。ゆゑ南山ふ
對さつ。終よ件の剣を獲て。楚王と抱怒んとを。かゝり。祝ふ楚王の夢す。
一個の少年の。眉間の廣さと。一尺あまりあるが。王を父の仇さて怒んとを
とあるんさう。ようて。ようとれを憎こそ。眉間尺が頭をとりて。千金を
賜べーとて國中ふ募ーゝば。眉間尺脱ま去て。山中ふ呻吟ゐどよ。客ゝ
ゝどこまふあゝ。そのうち歎く故を問よ父の仇人を報ひるゝるこの顔ふ
を物語まば。客ゝて感激ーつれゝふ。楚王頻ふもん刃が頭と干將の剣を
求むこまを獲て献らば恩賞限るのらんとるゝ。この二物をとれふ借さば。

つれ此もん刃が爲ふ仇を復べべとつべ。眉間尺飲びく。ゆゑてこづら刎つ。
頸と剣を両手ふ引提生るが如く立ようけ。客こまとなく涙を流ーつれ此
刃ふ眉ゝ。と言を故て誓ひーゝば。軀ハ撲地と仆まようかくて客ゝ沈を
楚王ふ奉まば。王欣びてこれを入るふ眼を瞪ビ歯を切りゝの母生るふ異なゝば。
客王ふ申ゝ。これハ勇士の沈るゝ。煮爛ーのくといゝば王こまをあひて。
大釜ふ獲ふ湯をゝぶビこまを煮ゝ三日三夜よ煮べども。骨だゝりも生
ゝゝば王こまを怪こそ。こづら獲の母ゝふ向て。さゝ覗んとまる示を客ハ
背ふ入りて干將の剣を引拔王の沈をうちゝ誘せば。獲の中へ碓と入る客剣
をとりるゝ。こづらも刎ねて三の首獲の中ふて。りゝともふ爛まつく。
何まこを王ともまこ沈がさけまば。楚王の沈ホ。三の沈を一つふゝ葬りぬ今ハ母沒南
の北のくゝ。宜春縣の界る。三王墓こまるゝ。といとふくゝう漢土の書


干将が剣三頭を烹む
みな尺干赤
行客
楚王

ゐもえそうとゐゆるのぐらゐれハ盃のうるれば酔客よのミ伴ヨ(ヒ)て。物の吾悪を辨ずべき。力なるけヨべ忌〻〻〻。髑髏盃の名と負せれ。春の物の屠蘇所散う。上巳の桃花酒。端午の菖蒲酒。重陽の菊花酒なんどハ。香を顫とるとものく。祝義の席へ面白〻〻なるねべいと朽とく〻〻こ〻ろ屋先生ゐらぶるふ名つけ釈のあ〻紀う紙。明白ふ説めしく。眉間尺といふ名を除き。髑髏盃の称を削うてめぐ〻紀席へも折〻〻入さうてのへ(ヒ)とうち芝ゐつゐ紀口説ハ見臺先生うち点ハ。ゐ述懐理りゑ。ごヨハ鞆絵を附しるふうつて。眉間尺の名を負〻。底圓〻して深けヨべ。髑髏盃とハ唱へるらん。世俗鞆絵の故実をきゑべ。或ハ眉間尺ホ三人の沢獲の中ゐて戦ハ象るの。とゐふ。ゐ稗の俗説を笑ゐ〻る。生好事がかくのごふ教風宗とるのせるのヒ。又猜とるふ原ゐ盃へ鞆絵をつけゐるも。ゐ浪の紋と謡ハが如く。水のうづゐ〻形とゐうえ巴字をゐるゑと訓とハ。俗説をゐひよ曲水ふ鰐を流さとゐふ故ゐるもあヨべ。鞆絵をハ画ゐ〻らん。ゐれば彼も是も。ゐゐ悟ゑ。夫鞆絵ハ。眉間尺ホ三人の沢ゐるもあべ。又巴水ゐるもあべ。鞆ハ古訓由伎と。又古の俗言を襲武多とゐう。應神天皇の産せ〻紀宍腕の上ヨ生ゐう。故その名を稱て誉田天皇とゐ紀。上古の俗鞆を号て。襲武多とゐふと日本紀ヨ見えゐう。ゐ鞆とハ。むゐ射るゐ。臂へうゐ我具と。ゆ紀とゐひぷんとゐひぷゐとゐふ。その喝ハ異るれども。その物ハもほ。むゐ神社へ。大刀弦弓箭。鏡玉。鞆。馬ゐるど紀進とるふ。或ハ木をゐて造う。石をゐて造う。又略〻ゐその形を画紀てもゐるゐ。鞆の絵とハ。ゐの字を約て鞆絵とハう。今ゐる母馬を画きて神前ヨ掛る紀。絵ゐとゐふがエ。ゐ絵馬も。真の馬を奉納ゐうゐるゐの。その形を画〻ゐきゐう。

絵るの号ハ出来しなり。かゝるべし鞆絵も神へそまるゝ起るのとゝ絵ゝ。
一ツ鞆絵三ツ鞆絵ゝるんどいふハ。その麦わふ従ふのゝ赤同今演らゝ。眉間
尺がつゝハ。晋の干宝が。搜神記のあり山ゝ。ゝるれども搜神記ハ楚王の妃乃。
鐵の丸を産ゝ乃ゝとハ。赤干ねゞ子の名を赤といふ。ゝえて眉間尺と唱る
ゝハ。この方の軍記ハ赤がゝ紙ゝ。搜神記ハ眉間の廣ゝ一尺とあるゝ。
ゝ眉間尺ゝハ名つけゝ乃。さて彼搜神記巻十一ハ漢の趙曄が呉
越春秋を此彼撮合ゝ。一條の物語ゝハ。ゝる。この呉越春秋ゝハ。
當時の小説なれどゝ古さ乃
ゝ乃。吾ゝ乃ハ搜神記ハ。干ねゞ子の赤が眉間一尺とある也。かの呉越
春秋ハ。伍子胥が眉間一尺とある紙備用ひゝ乃。
（呉越春秋ハ呉の十二の第十五巻ハ呉王僚ゝ元年の。伍子胥を記てゝ。
眉間一尺。云ゝとゝ。）かれば眉間尺ゝハ。伍子胥をいふべゝ。

干ねゞ莫邪が雄雌の剣を似ゝ乃ゝハ同書巻二ハ越王騎射の切ゝ。赤
あゝ。干将ハ靖て名剣二枚を鑄ゝ。歐冶子と師を同
ゝ。俱ゝ剣をつくゝ乃。ゝれゝ乃。先越の國。二枚を東献ゝ。闔閭（呉王の名）
ゝ乃て宝とゝ。故ゝ乃。劔匠ゝ。赤二枚を似ゝ乃。一ゝ干将といひ。二を莫邪
といふ。莫邪ハ干将が妻乃。かゝて干将劔を似ゝ乃ハ五山の鐵精。六合の金
英を采ゝ。天ハ候ひ地ハ伺ハ。陰陽光を同ハ。百神臨視ゝ乃。天気降ち
ゝ。金鐵の精消ゝ乃ゝ。倫流ゝ。ゝ乃ハ干ねゞ子の由ゝ乃。かゝのごゝ乃ゝ
尚月ハ乃ゝ。遂ハ莫邪がゝ乃ゝて。夫妻倆ハ冶爐の中ハ入る程ハ。干将が
妻。髪を剪爪を剪。童女童男三百人ゝ乃ゝ。槖を鼓。炭を装ひ。夫婦合體
ゝ乃。陰陽の劔成ゝ乃。干ねゞ子の陽を匿ゝ乃。その陰を献ゝ乃。闔閭ハ乃宝
劔を得ゝ乃。魯の使季孫ゝ乃ゝ。魯の使季孫ゝ乃ゝ。莫邪ゝ乃ゝ。

おこりつ。季孫叡を抜て見るに。鋸の中缺くるを。季孫の臣。歎息して輟う納め。こゝの叡は実に天下の宝なり。今宝叡のいでたるは。呉の覇王ゝ是れ べゝ祥と。惜る缺るところの有。亡んとも又遠らじ。呉れこの劍を好むと いへども。受がたゝて。受ぜて寄ぬ。闔閭又國中の金狗（狗は呉の又の名こゝ又曲かゝ）を作るのふ 仰て。よく鉤を作るのみ。是を賞とるふ。百金をもて其人とす。時に低鈎者。 利を貪るが為ふ。その子二人を殺し。血釁て遂に二狗をつくりぬ。これを呉王に 献ずて。賞金を求んべ。闔閭のゝくらく。狗をつくるものは妻子。没ひそう 賞を求るいふぞや。とゝべ作狗者答て。某が狗は。貪る有る子どもを殺 し。血釁て終に二狗をつくりぬ。かゝるべ凡常ふ異ことゝふ王に是を奪てもろう とゝべども。ぶ狗は甚妻子。既ふひとつふ藏められぬ。これをもぐ。とゝべ。 そのりの鞍の狗ふ對ひて。ふとうの子どもの名を呼び。呉鳴。扈誓は

何如ふある。そく出ると。呼もめゝぬよ。両の狗跳り出て。又が胸ふぞ著こう る。呉王闔閭ゝ是を見て。且怪ゝ且嘆ト。ぶて百金を与へてう。 （第一條より分ける。依よ玉篇の字を） めて澤ゝるゆゝ。 ゝゝふ要を摘り。こつべ呉越春秋ふ呉王とあゝて。楚王とゝゝ。又千将と 叡ゝ王ゝ。是を捜神記ふ假借て呉王を楚王ゝ。三月を三年ゝ。魯 の季孫が叡を相して。鞆の中奈采ぞう。缺る有る遠らば。呉ゝ 亡んとゝゝ。楚王ハ千將の劍の故ふを喪ふ。低狗者が 子を殺し。血ぬりて賞金を求めゝとあるを假て。千將が子のこゝ。別紙。 叡と共ふ客ゝふ托せ。とゝ作りゝえゝ。又客が命を損ず。千將が子の為ふ。 楚王を殺ゝと作りゝ。專諸が王を假ることゝ。是も又呉越春秋一巻ふ。伍 子胥が楚國より脱て呉國ゝ比。呉ふ專諸と唱ゝ。勇力ゝ双の 俠客あり。伍子胥ゝ是ふ相語りて公子光（所云闔閭）ふ説引て彼專諸を

糧しつ。そのち公子光が王僚をえらぶ。炙魚の中ふ劒をかくし納す。
專諸をして王僚を刺せとあるを嫁りしう。又客が有るくも赤眉が
為よ命を將しとせしよい蘆中の人を擬しるるど。伍子胥が楚を逃れ昊よ
入ぬ追兵背よ迫ども。津よ舟出る時ふ蘆の中よう一束を漕うて子胥を
渡し。又餉をり生く食せしべ。伍子胥ハ叮嚀よ再生の恩を謝び吹え。
こがるのとみ忘れても。漏らしぬひそとりべ芦中の人喜づどされ人よ告ど
とものこれをきるのめらべ。ふ身をれを疑ひるん。ふ面りよ死て疑ひるのら
高ん。といひもめど忽地入水しそ死しうと。亦昊呉越春秋よ見えしう。戎
国の仁侠ものかる報尋。こを假りて客のるとを世狄赤眉間がめの
治の全體を推とえい。伍子胥が楚國へ攻入りて。楚の平王の墓を發き屍
を笞て。父の仇を報ひ。決紀ニ傳あり とある話を綴りえて。千載が子の仇報ろ

るのふきう。又楚王の千將の劒を獲て。こを煮ると三日三夜ありそ。そのいろ
変らぬと。伝りしふ呂氏春秋巻の十一至忠篇第四ふ。齊の湣王が怒て文
執を煮る。三日三夜ありそ。その色変らぬとあるを嫁りしう。呂覽し。
齊王即齊湣王。宣王の子。病を疾し。人を宋國よつ遣して。文執を迎しむ。文執至
て。王の疾を視く。太子ふきうて。王の疾ハ必已しつべ。きうとのどの王
の疾已えい必ずれを報しのふべ。といふ。太子その有を問よ。文執答て王の
怒彊うらざれべ。その疾治えべし。王を怒らしるるいられ必死れるん。
といふ太子こを吹て。文執を拜ひ。苟も王の疾已んよん。臣母と言ふ死と
りて王ふ爭ふて必こを救ふべ。那人ハ先生。患ひのるといよ丈。孰手
点沢でされ死をりて王の為ふ。療治せざらんや。と乗りしう。太子とその
期を定めしう。かくて王の居と三ばびよるべども到ずど。王既ふ怒る上酷し。

やうやくおして文熟手まねまとりまろれども病牀より登るふ屢をも解ずして。王の衣を穢汚しつ。その疾を問べ王ますます怒て。与ふ言ぶ。ひいらく叱退んとするふ文熟ふ退ぶ。こよ於て王の疾頓ふ已ぬ。まろふ怒瞋ぬ。ぶ有ふ。左右ふ命て生ぬぶ。文熟を烹ふ。とい紀まれのへて。太子と王の后と。急ふ爭ひいさめて。こまを救んとまとども聽まず。遂ふ鼎をのて生ぬぶ。文熟をぞ烹ふろる。かくてこれを襲て三日三夜ふして。顔色変ぶ。そのとき紀文熟ふ沈を擥て。減ふれを死さんとのべるのどく覆して陰陽の気を絶ざるとのひしぶ。王ますます覆をさして。文熟遂ふ死ぬとい。こまを捜神記す。楚王干将が子の沈を煮て。三日三夜ふして。顔色変ぶと似ぬ。亦彼宜春縣の界ふ。三王墓と唱る古墳あるふ因て。三ッの沈ともひ似せるらん。こまてゝ虚妄ふてれども。いまへの小説ハ。その出処ふ必ず父母あり。又外邦中禁の小説ハ唐山の小説を似ぬる者ぬ。まろれども世俗。覧る人情ぬ。ざるものハ。その虚言ぬるをまろて。出処あるをまぶ。婦幼ハこまを実ふとして。その虚説をまろぶ。これ小説を似るとの。容易かぬざるべ。ばさくよく視んと。也又雄し。又和漢虚実晴合のとまのぬ。日本紀安康紀ふ。眉輪王父の仇と称して天皇を弑しまる。雄略紀ふ。眉輪王逃まて。圓大臣の宅ふ入ぬ。天皇雄略使を遣して。こまを求めへ。大臣まるのちその女韓媛と。葛城の宅ヒ區を献て。眉輪王と黒彦皇子の罪を贖んと請ぬぬ。天皇聽ぬ。火を縱てその宅を燔しまる。於是大臣と黒彦皇子。眉輪王と三人倶ふ燔死さる。時ふ坂合部連贄宿禰。皇子の屍を抱て燔まぬ。その舎人ふ。燔る亦を取ふ。骨を擇ぶ。こまを一ッの棺ふ盛て合葬し。新漢擬本の擬ハ槻の誤南ふ立るとえぬ。眉間尺と。眉輪王とその青桐似ぬ。又眉間尺と。楚

王客の頭煮爛まで分別なしと。あるは楚國の臣下。三の頭を。宜春縣の界に合葬して三王墓と唱ふるといふ千宝が小説と眉輪王と黒彦皇子。圓大臣と共に燔死ましまして。骨を擇がたしとあるは。贄宿祢が舎人等合葬して新漢擬本の南に葬るといふ日本紀の説と。粗相似たり。天地の間物ありて。對することべかりしかば。かゝれバ鞆絵を水の文なりとおもひ。悍曲水に觴を流すといふなるに因る生物と又鞆絵ハ眉間尺等三人の頭を象りたることとおもひ悞て髑髏盃と名つけたる白物と亦一對なり。今こそあれ。真の眼あらん主に遇ハバ。よからぬ名をバ除かれじ。しばしまちねへといへバ。盃ハ欽びつゝ舊の匣にぞ入りにける。

第九　橘逸勢落命の一行物

亦その跡へ推ひかゝれる。書画一張の懸幅ハ。二八ばかりの尼君の墨乃衣にいとゆかしう。容まして卑しからぬ殊にぬけしたる肖像に。妙なる筆の跡とめて。富貴仇人合。貧賤親戚離と題せしへ。これぞ当時三筆の。その一人と世に名だたる。橘朝臣逸勢が。一行物としられたり。そのとくさ古画の尼君ハ。おもひあまれる眉うち顰め。ひそかに彼落命人逸勢が女なる妙冲にて侍るぞ。さても我が父年老て。させる伴健岑が。謀叛の与に坐せられて。東路へ流されたまひしが。配所までハ絶もあらじ。旅にむなしくなりたまひぬ。さりながらその罪にあらざれバ。終に大赦の時にあひ。白骨坂路の朝恩に澤ひ。剰位を贈られ給ふに。傀儡の謡曲に似たりしものが。あらぬ悪人に書綴り。伴の強宗と共らんいふ名も曾しらぬ叛逆人の副浄まつりひしかバ婦幼ハしらで。すべて橘逸勢ハ大悪人ぞと憎みあへり。この上ありを説あかされバ。生る世の冤枉より。死ての後の誣言に。哭ける其のいかぞかし。心

苦くも感ぜらめ。既ふたりを證文あり。文德実録巻之一。第二十九ゑ嘉祥
三年。五月壬辰。流人橘朝臣逸勢ふ正五位下を追贈し。沼をなゆ。
遠江國ゑ下りのひて。本郷ゑ。ゆ。葬らしめひろ。抑逸勢ハ。右中辯
従四位下。入居の子ゑ。性とをり放逸ゑて。細節ゑ拘らぬ。尤まて隷書ゑ
妙をり。されば宮門の榜額ふこの人の手跡見在せり。桓武のおんとき。
延暦の季遣唐使ふ隨て唐朝ふ到りしぬ。唐の中又人ごとを稱ゑく橘
秀才とのひとをんかくて帰り来るの日。教官と歴事しが。年老羸病をる
とりて。閑居ゑて仕ゑそまらぬが。狂ゑ兼和九年。連ゑ伴健岑が謀
反のことゑ濡くまて。掠拷まで服ぜ。ゆうてその死を減らまて。伊豆國ゑ配流
まをる。ちなめ逸勢ハ配所ゑ赴くとをれ。只一女あり。悲泣て。又を慕ひ。歩
ようぞ従へば。官兵監送者ゑまを叱りて。従へをを許さねども。女兒ハ行ゆ

遠くも去られて書に止て夜にも紀潜ずに従へ行よ。逸勢は遠江の国板築驛まで到行つ。こゝに逆旅に投ずる振搏て悲めども。救へるものあらざれば。やがて驛下に葬りて喪前に庐を結び。屍を守りて遂に去られ。落髮して尼となり。妙冲と名告げるされば亡父の為に。誓念小憂時も懈らず。曉るより暮るまで。苦行れ常に泣くられば。路人もこれが為に涙衣襟を濡しぬ。かくて孤一葬まと。泊おつるなびて。女僧は父が屍を負て。晴ずに坂京せらべ。時の人感嘆稱て孝女と呼びのせり。又同書の巻の五の第十二張に。仁壽五年。五月甲寅。正五位下橘朝臣逸勢に。従四位下を加贈しのへよ紙の我しろ。ふに正史にも。是ど國史に。俗稀なれば実なるもとゝ。で糸竹のうとうに。艶曲を。さもこそとふりの為に驚き行る

し。此物語を他に。善人を悪人にして。逸勢。悪人を善人に。他に。ど。三代記。勧め。悪を懲し。人情を演。理義を正しを。野史とも。真の小説とも。唱ると。吹えるに。悪人なるぬるに。又を悪人といふく。朽ちて。量あまといひけるに。酸鼻のあまぞ。こなりとも。目を拭ひかく。嘗べ。逸勢ぬしに。学問もよう。手迹もよう。唐山にも名をとゞめ。いとも愛しに。元文人なり。一旦罪を。犯なれど。冥後に罪なの。犯して。吹えく。位さへ贈りなるとこゝなるに。対が。孝行と。神も憐れこれに。君も恩恵せのへふるんにりつべきりのへ子なりけり。かゝる孝女のありとも。ちゝど。妙冲尼といふ名をとゞめて。識る純さよ。これらの條こそ。草紙のそへ。書もそめて。世の少女子に。孝行を勧るが。書作るりの本意なるべ。さへ。偶の。謡曲へ。その名の猛く。吹あるとゞ。吾人へも

丑浄土。その名の優ふるさぶ。ろうらぬ人でも正生へ扮ゆうを分る
なるらんさんべ左丈辯希世のでえ。菅家左迁のうのんどよ。かぐらひ
ゐる人あいあうねどまわりあわせのようらどく。震死まるひ」ゑ。侍人
の部へ入ゑまて世よ悪名を謡ゑれど。ゑる人ぞゑるゑ。あーの流花
のゑのゑのゑのゑね。捨び戯まるひね。ところ叮嚀ふ慰まべ。驩ーえ
人の言の柴ゑ。花開ぬ月も春ゑる。
とも俗とも恨むべまと回應ゑたつ菩衣身の幡廣き尼丈女が
巻の徳ゑて有ぐゑけま。

昔語質屋庫巻之四終

武州腰越